

香美市 御在所山

「御在所」とは、神や仏、高貴な方のいませ所のこと。県内、四国内にも御在所(五在所)と名の付いた山には信仰や貴人にまつわる伝聞が99い。この山も源氏との戦に敗れた平家一門が安徳帝と守て阿波から土佐に逃げ、この山の南西山麓の丈屋敷に住したことから御在所山と呼ばれるようになった。一説には帝の従弟宰相平教盛がこの山に祀ったため御宰相山がなまって御在所山になったのではないかと町史にもある。また「五在所山」とも書いていたことから、五つの在所(集落)があることから名付けられた説もある。丈屋敷(王屋敷)、大又保(大又保)、日の御子(帝の子)など帝や公家ゆかりの集落名もある。(四国百山より)

丈屋敷の滝
土佐の名水四十選で有名。山をへだてた轟の滝から二体の竜が移り住み、この竜が「わめれる」と周囲の山麓一帯が丈屋敷になったといわれる。黒岩清水さんを中心とする丈屋敷の滝五人衆が自分たちの力で整備して世に出した大迫力の名瀑。

木馬茶屋
昭和50年頃までは木材や木炭の搬出には木馬が大活躍していた。ここは木馬を引く人の休憩所だった。(説明板より)

平家観音像の碑
昭和33年、地元の人々が2mあまりの地下より持経観音像を掘り出し、この像は安徳帝を抱いて海中に身を投じた二位尼が持っていた仏像ではないかとして大切にされている。



楽しみながら山に登る「登山」。信仰ある神や仏を拝むために山に登る「登拝」。この山は「登拝」が似合っている。



五山所道
手やり石

田んぼ跡の石垣群遺跡

人工林の中のレカソリ歩道

地質の別れ目の谷

水田跡・石垣遺跡
石を積める技術の継承はどうなるのか。

境内土俵
かつては奉納相撲が行われていた。

大鳥居物語
ここに大鳥居の石の鳥居は大正13年若い土佐の村から部材を人力で引き上げて、四方八方に縄をかけていぼり、立ち上げたということ。故に松本 尊安さんがおいの藤原 健一さんに口伝している。藤原さんとは偶然登山で出会い、この山に関するたくさんの貴重なお話を聞くことができた。不思議な縁を頂いて感謝の気持ちで(この270)は藤原さんに聞いたお話

香北を流れる物部川のほとりの景観はゆたかと穏やかで、まるで3000年の世界にも思える。「人は誰でもその故郷の光と風と水と空気に育られる」といったやなせたかしさんの生まれた村、もろじそばにある。

一年の終わりに山を歩くとつい一年間を振り返っている。一日には終わりがあつて一月にも終わりがあつて一年にも終わりがあつてそして一生にも終わりがあつて山歩と同じように一歩のつみかたを今と生きている。

眺望絶佳! 物部連山展望所

三角点1079.1m
平家の土佐に祀った石塚

千原神社 石仏群
ミニ八十八ヶ所

鷹の石片竜
片は南海の竜の頭がとれたという

大日如来堂
安全祈願所

金峯神社 富貴神社

尻見坂
逆り返るような急坂。前を行く人の尻が目に見える。

展望所
植林が生長して眺望はいい。ベンチ

大岩の洞
大杉群

大杉群

参道に大杉群の巨木!!
回りに枝をたげる。

信仰の道 登拝道
高齢の女性が息子とおぼしき人と登つて会いに出会う。信仰心の厚い人が登拝する神聖な道。

大鳥居物語
ここに大鳥居の石の鳥居は大正13年若い土佐の村から部材を人力で引き上げて、四方八方に縄をかけていぼり、立ち上げたということ。故に松本 尊安さんがおいの藤原 健一さんに口伝している。藤原さんとは偶然登山で出会い、この山に関するたくさんの貴重なお話を聞くことができた。不思議な縁を頂いて感謝の気持ちで(この270)は藤原さんに聞いたお話

山頂の葦生山祇神社の祭神は大山祇命と安徳帝と平教盛が合祀されている。社殿の立派な彫り物には菊の御紋と桐の御紋が彫られている。氏子がおこもりする通夜堂もある。

皇室紋章
十六花弁菊

暖冬の2018.12.8
山頂の手水鉢には厚い氷がはっていた。

三角点のそばには安徳帝に仕えた147人祀った石組みの塚がある。(藤)

大日如来堂のあたりからは木の間ごしに太平洋がキラキラ光って見える。

岩の中に石仏。清水がわいている。かつてこの水は、飲んでおまじないが持ち帰ることは禁じられていた。(藤)



手水鉢 文政7年
1824年
江戸時代末



「四国百山」
香美市公報



林道 御在所線
梅又保へ 2019.5.18

普通神社は南北方向に建てられ、御在所山山頂の葦生山祇神社は東北方向に見える高板山の方向を向いて建てられている。(高板山は安徳天皇陵墓として伝わる)

香北を流れる物部川のほとりの景観はゆたかと穏やかで、まるで3000年の世界にも思える。「人は誰でもその故郷の光と風と水と空気に育られる」といったやなせたかしさんの生まれた村、もろじそばにある。

一年の終わりに山を歩くとつい一年間を振り返っている。一日には終わりがあつて一月にも終わりがあつて一年にも終わりがあつてそして一生にも終わりがあつて山歩と同じように一歩のつみかたを今と生きている。



登山口より
ゆくり2時間

初めての御在所山。
期待を抱えて登る。口く白い息は静かなじぎの林に消えていく。

大屋敷
徳帝や平教盛一行が居住していたと伝わる(王屋敷)

